

植民者二世と朝鮮

——森崎和江の詩におけるダイアログ、そして共振について——

杉浦清文

はじめに

1927年、森崎和江は朝鮮慶尚北道大邱三笠町に生まれた。その後、森崎は、1944年に内地の福岡県立女子専門学校（現在の福岡女子大学）に進学するまでのほぼ17年間を朝鮮で暮らすことになる。その間、森崎は朝鮮のエッセンスをたっぷりと吸収して育った——「私の原型は朝鮮によってつくられた、朝鮮のこころ、朝鮮の風物風習、朝鮮の自然によって。私がものごころついたとき、道に小石がころがっているように朝鮮人のくらしが一面にあった。それは小石がその存在を人に問われようと問われまいと、そこにあるようなくあいがあった。そしてまた小石が人々の感覚に何らかの影響をおよぼしているようなくあいに、私にかかわった」。¹⁾しかしながら、朝鮮と自分自身との切り離せない関係をこうして語った瞬間、森崎の心身は分裂し始める。そして彼女は自分の語った事実をこう撤回するのだ——「いや、そうではないのである」と。なぜなら、森崎は朝鮮で日本人、いわゆる内地人であったからだ。しかも、彼女はただの内地人ではなかった。彼女は「内地知らずの内地人」だったのであり、「内地人が植民地で生んだ女の子」だったので。 ²⁾ いわば、森崎は植民者二世としての原罪を強く自覚してきた詩人なのである——「こうして朝鮮の風土や風物によって養われつつ、そのことにすこしのためらいも持たず、私は育った。が、敗戦の前後を日本に来ていたので、やがて、支配民族の子どもとして植民地で感性を養ったことに苦悩することとなる。それはぬぐい去ることのできない原罪のように私のなかに沈着していった」。³⁾

とはいえ、自分自身の立場に苦悶しながらも、森崎は朝鮮半島のあの自然や人々によって育まれた、その独自の感性を捨て去ることなどできなかった。その感性は、森崎の詩作に大きな影響を与えていくことになる。1974年に出版された詩集『かりうどの朝』の「あとがき」で、森崎はこう述べていた——「私は、詩とは、本来、他者とのダイアログであると考えていた。自分以外の、自然や人々との」。⁴⁾ ここで述べられている森崎独自の「ダイアログ」について理解を深めようとする際、彼女の詩「シンボルとしての対話を拒絶する」⁵⁾のまさにそのタイトルが極めて示唆的であることに気づくだろう。森崎の強調する「ダイアログ」とは、たとえば、自己が他者に対して形式的で表面的に行うような「シンボルとしての対話」とは違い、他者に対してより開かれた実践である。しかもそれはまた、自己の中に他者を感じ、他者の中に自己を感じるとような、換言すれば、自己と他者が深く共鳴し合うような営為であるともいえるだろう。たとえば、1998年になって、森崎は詩集『地球の祈り』を出版するが、その「あとがき」では、かつての「ダイアログ」に関する説明の「不十分」さを認識し、「共振」という言葉を付け加えている。

むかしのその詩集のあとがきに、「私は、詩とは、本来、他者とのダイアログであると考えていた。自分以外の、自然と人々との」と書いています。この思いは今も変わりません。しかしダイアログということばは不十分です。私は、子どもの頃から鉛筆やクレパスをおもちゃにして一人遊びをしていました。そして、いつしか、心やからだに響いてくる自然や人や生きものとの、共振ともいえる世界を感じていたようです。それはかつての朝鮮で生まれ育った私が、話しことばのちがう人びと——朝鮮や中国やロシアやヨーロッパの人たちもいました——の、大人たちをも、ちいさくちいさく思わせるほどの美しさと広さで、朝や夕方の空が色調を変えることに心打たれ、ぼろぼろ涙をこぼしていたことなどと関連していると思います。小学校入学前後から、しばしば、そうした体験をくりかえしました。⁶⁾

ここで森崎は、「ダイアログ」の意味をさらに押し広げ、詩がまた「心やからだに響いてくる自然や人や生きものとの、共振ともいえる世界」であるという考えを示している。だが、この後すぐに続けられた、森崎の次の言葉を見逃すべきではないだろう——「その、自然界といのちとのシンフォニーへの愛をはぐくんでくれたのが、「日帝時代」の大地であったこと、また、その大地に響きわたっていた歌とリズムであったことが、つらくて、幾度となく崩れました」。⁷⁾つまり、森崎にとって、いわば日帝時代における朝鮮半島の自然や朝鮮の人々との「ダイアログ」、ひいては「共振」を深化させることは、皮肉にも植民者としての立場を彼女に深く認識させ、自分自身を厳しく問い質すことになるのだ。にもかかわらず、それでも、森崎は詩を書き続けるのである——「私はくりかえし湧いてくる自己破壊への欲望をこわがりながら、なお詩を心に待ちつづけるだろう」。⁸⁾

本稿では、植民者二世としての罪の意識に苛まれながらも、(旧)植民地の記憶、とりわけ朝鮮の自然や人々との絶え間なき「ダイアログ」、あるいは「共振」を通して生み出された森崎の詩——主に「哀号」、「海」、二篇の「空」と題された詩、そして「千年の草っ原」——に着目したい。それにしても、森崎が朝鮮半島の自然を回想するとき、空に関する言及が多いのはどうしてだろうか——先の引用の中にも「大人たちをも、ちいさくちいさく思わせるほどの美しさと広さで、朝や夕方の空が色調を変えることに心打たれ、ぼろぼろ涙をこぼしていた」と書かれていたことに気づく。またさらに、ある時期から森崎は、詩の中でも「いのち」という言葉を用いるようになるが、それはなぜだろうか。

1. 哀号

1924年に朝鮮の京城で生まれた作家である村松武司⁹⁾は、1972年に母方の祖父である浦尾文蔵の人生を土台にして書いた『朝鮮植民者——ある明治人の生涯』を出版した。その中に「鞭と哀号<植民者の眼V>」と見出しの付いた文章がある。そこで村松は、父方の祖父(村松武八)のことを回想している——明治40年に朝鮮半島に渡り、そこで店を切り盛りしていた祖父は、村松をとともかわいがってくれたという。けれども、村松にとって、祖父の面影はしだいに、ある「異常な」光景と一体化していくのであった。

〔朝鮮の婦人たち〕（五、六〇人はいたであろうか）は、各々屑にしてほどいた毛糸を袋につめて、頭上から重たそうにおろし、祖父の武八の点検をうけている。武八は、毛糸を大きなてのひらでつかみ、湿りがあるかどうかたしかめる。ついでに秤にかけさせる。しかしこの光景の異常さは、実は、婦人たちの泣声、祖父の怒号にあるのだ。女たちの早口な訴えがそれに消されてしまう。ときおり、怒号。「哀号」という泣声。婦人たちが連れてきたり、背負ったりしている子供らは火がつくように泣きさけぶ。そのたびにわたしは窓の棧をつかんで伸びあがる。喧騒のなかの悲鳴。——ひょっとすると、わたしは幼時からこの慢性的な環境に慣れてしまっていたのかもしれない。あるいはこの日だけが、特別に印象の深かった日であったか。それは判然としない。わたしは恐怖におののいていた。愛すべき祖父を、同時に憎むべき巨人として眺めた最初の複雑な日であった。¹⁰⁾

村松は、実際に祖父が「鞭を持った姿を覚えているわけではない」というが、祖父のその存在に「鞭の権力」を感じたという。¹¹⁾ 村松は述べる——「武八を通して、初代植民者の像を、わたしはいま、鞭と「哀号」によって結ぶ」と。¹²⁾ つまり、村松は「哀号」の「ほんとうの慟哭」を「幼いときから知って」いたのだ。¹³⁾

また、考えさせられるのは、1932年に福岡県で生まれたが、幼年期を朝鮮で過ごした作家、五木寛之も「哀号」という声に囚われていたという事実であろう。1969年1月22日の毎日新聞夕刊に掲載された「長い旅の始まり——外地引揚派の発想——」（下）の中で、五木は幼年期の「父のイメージ」を次のように書いていた。

私の父は九州の農家の子弟として生まれ、上昇志向を胸に抱いて給費師範学校生徒として帝国官吏の最末端につながった。そして私の記憶に残っている父のイメージは、毎夜、夜が白むまでランプの灯の下で検定試験のための受験勉強に血走った目を光らせていた中年男である。そしてもう一つ、深夜の奉安殿の夜目にも白い桜の満開の下で、樹の幹につながいだ朝鮮人学生を竹刀で掛声とともに打ちすえていた父の姿である。寮の門限を破った学生が「哀号！」と身もだえるたびに白い桜の花弁が降るように散るのだった。¹⁴⁾

「哀号！」——五木の父が竹刀で叩きつけたときに発せられた、朝鮮人学生の悲痛の声。その光景が映し出しているのは、その当時の内鮮一体というスローガンの欺瞞だといえる。ここで五木は、大日本帝国の植民地主義のイデオロギーに色濃く染められた植民者・日本人の非人道的な行為を不気味に描写している。

だが、ここで忘れてはならないのは、村松や五木のように森崎もまた、日本人に虐げられた朝鮮人たちの「哀号」という痛ましい声にとりつかれた作家の一人であるという点だ。¹⁵⁾ 森崎はたとえば、詩集『ささ笛ひとつ』における「海」という詩の中で、こう書いている。この詩には「哀号」という声が轟き渡る。

夜ふけ
地面をたたいて

声をころして
哀号 哀号
少女はむせびなく
新羅王の陵のまえ
にほんが負けますように
草にひたいをすりつけて
母国の祈りを¹⁶⁾

その当時、こうして「むせびな」いた朝鮮人は、この「少女」だけではなかつたろう。五木や村松が目撃した植民者・日本人たちのあの行為は、その当時、日常的なものであった。ならば、「哀号 哀号」は、日帝時代、植民者・日本人たちの支配下でもだえ苦しんだ、あの頃の多くの被植民者・朝鮮人たちの恐ろしくも日常的な声だったと考えられる。

もちろん、森崎に「基本的美観」を与えてくれたオモニもまた、あの頃の様々な局面においてそうした日常を生きていた。森崎の幼少期の記憶は、オモニ、いわゆる朝鮮人の乳母の面影と共にある。つまり、だからこそ、森崎にとって、オモニへの思いはそう簡単に語れるようなものではないのだ。森崎は植民者である自分を育ててくれたオモニへの感謝の気持ちを決して忘れることはない。けれども、その気持ちが深ければ深いほど、森崎はより複雑な心境に陥っていくのである。

敗戦後二十数年、私は私の鑄型である朝鮮を思うたびに、くだらなくも泣きつづけた。この断章も泣き泣き書いている阿呆らしさである。どうしようもない。涙から脱出するため、私は長い間、目録をつけてきた。私の生誕以来の年月日と重ねあわせて朝鮮の事件、出版物、ことわざ、民謡、生活法などを書いていくのである、私の生誕と成育とに重なっているオモニらのこころに追いつくだろうと夢まぼろしを追うのである。個体の歴史が自然に対する感動をともないだすころ、つまり三、四歳のころにもっとも深く記憶しているものは何だろうなどと、私は、あたかも歴史の小道を踏みかえすかのように暗雲のなかへ入っていく。くりかえしくりかえし、そうしてきた。しかもなお私には個体の歴史をさておいて頭にえがくことができるアジア史・世界史のほうが鮮明なのである。また、朝鮮の民衆や農民学生がたどった植民地闘争の書物上の歴史のほうが明確なのである。それでいいのか、私は。そんなことで逃げを打とうとするのか、十七年間もあそこを食って。オモニ！といううめきが腸から裂け出る。ごめんなさい、などではないのである。オモニの生活内容を知らず、そのことばも知らず、しかもそのかおりを知り、肌ざわりを知り、髪の毛を唇でなめ、負ぶってもらい、やきいもを買ってもらい、ねむらせてもらった。昔話をしてもらった。私の基本的美観を、私は、私のオモニやたくさんの無名の民衆からもらった。だまってくれたのでない。彼らは意識して植民地の日系二世を育てたのである。ようやく今ごろわかる。オモニたちの名前すら、私はもう記憶していない。¹⁷⁾

「植民地の日系二世」である森崎が、オモニの数ある記憶と深く結びついた幼少期を回想するこ

とは、失われた故郷での懐かしき時間にただ浸ることを意味してはいない。それは醜悪な自画像を炙り出す瞬間となるのだ。1984年に出版された『慶州は母の呼び声』の「あとがき」の言葉を借りるならば、「鬼の子ともいうべき日本人の子らを、人の子ゆえに否定せず守ってくれた」オモニのことを思えば思うほど、森崎は自分の置かれている立場をより一層意識していくのである。¹⁸⁾しかし、そうだからこそ、たとえば朝鮮半島で生まれ育った日本人の中にオモニを軽蔑する者がいたことを知ったとき、森崎のその衝撃は大きかっただろう。30数年ぶりに出会った幼少期の友人は、「オモニ」を蔑称として用いたのだった。

[...] 在鮮日本人であった者のなかには、オモニということばを一種の蔑称として使っていた者もいたことを最近になって知った。幼時の友人に三十数年ぶりに数日まえ逢った。彼は次のようにいった。「朝鮮人が自分たちだけで国を作って何かやってるなんてどうしても考えられないよ。オモニやヨボに政治とか文化とかがやれるのかなあ。どう考えても馬鹿の集まりとしか思えんなあ」彼は軍人の息子だった。¹⁹⁾

このとき、森崎は、日帝時代を生きたオモニの窮地について考えずにはおれなかつただろう。詩集『ささ笛ひとつ』の中には「哀号」と題された短い詩がある。これはまさにあの頃のオモニについて書かれた詩ではないだろうか。

オモニ
ないている

大地の
はは

ははの
せなか

草の
せなか

草が
ないている²⁰⁾

「オモニ／ないている」から「草が／ないている」へ。しかしまた、「草が／ないている」から「オモニ／ないている」へと逆から読むこともできそう。いずれにしても、この詩の中で、「オモニ」、「大地」、「はは」、「せなか」、「草」という、それぞれの言葉が密接に関連し合っているかのように感じられる点は印象深い。だが、そうした重なり合いは、「ないている」という詩的言語の暗鬱な響きの中で異様な雰囲気醸し出している。

ここで改めて思い出されるのは、「オモニ」に対する森崎の次の言葉であろう——「オモニの生活内容を知らず、そのことばも知らず、しかもそのかおりを知り、肌ざわりを知り、髪の毛を唇でなめ、負ぶってもらい、やきいもを買ってもらい、ねむらせてもらった」。さらに別のところでも、森崎はこう述べていた——「私には母の背におぶわれた記憶は残っていないけれども、オモニの背中のぬくもりと髪の毛が頬や唇にあっていた記憶は残っている」と。²¹⁾ここで読者の詩的想像力がさらに膨らんでいく——幼き森崎は、育ての「はは」である「オモニ」に負ぶってもらい、その「せなか」から、朝鮮半島の広大な「大地」、さらにはその「大地」に広がる「草原」を見ただろう。森崎にとっては、そうした自然もまた彼女の独自の感性を育ててくれた「はは」なのであった。けれども、「オモニ」は「ないている」のだ。そして、「草」も「ないている」のである。

朝鮮半島で過ごした森崎の幼少期はまさに日帝時代であった。その当時、朝鮮人たちは、植民者・日本人の抱く偏見、あるいは非人道的な行為に苦しめられた。あの時代を生き抜いた朝鮮人たちの痛ましい姿が目につかんでくる——「大地」、すなわち「地面をたたいて／声をころして／哀号 哀号」と「むせびなき、草にひたいをすりつけ」る者たち。だが、たたきつけたその「大地」、いうならば「草」が根付いていたその「大地」は、植民者・日本人により統治されていたのだ。森崎の詩「海」で描かれたあの「少女」の一場面はまた、詩「哀号」の独創的な詩的世界観とゆっくり共鳴していく。

幼少期を朝鮮で過ごした村松や五木がそうであるように、森崎にとっても、「哀号」は常に植民者としての自分自身の立場を身に染みて思い知らされる現実的な声である。概して、森崎の詩には、いかなる形であれ、そうした「哀号」という声が潜在的に鳴り響いているかのように感じられる。

2. 空

朝鮮半島で幼少期を過ごした者たちにとって、あの頃、自分たちを取り巻いた自然は、大人になっても忘れることのできない原風景となっていた。詩「哀号」で示されているように、森崎が、朝鮮の草や大地を原風景として記憶してきたことは間違いない。しかし、森崎は、空に対して、さらに特別な思いを抱いてきたようだ。あの感動的な空を思うこと。朝鮮で見た空の記憶もまた、森崎を育ててくれたオモニの背中のぬくもりを思い起こさせるものであっただろう。朝鮮半島の大地で力強く伸びる草の群生、そしてそれらを天上からやさしく覆いながら無限に広がる空は、オモニに背負われた幼き森崎をも深々と包み込んだに違いない。けれども、それだけに森崎にとって、朝鮮の空の思い出は入り組んだものとなっていただろう。

ちなみに、朝鮮の空に魅了されたのは、森崎だけではなかったようだ。五木も村松も、さらには朝鮮を「懐しいといっちはならぬ」と自分自身を厳しく戒めた、あの小林勝ですらもそうではなかったか（小林は、森崎と同じ年に朝鮮で生まれた作家であった）。たとえば、五木の場合、1968年に出版された『風に吹かれて』の中で、幼少期に見た「秋空」を次のように描写していた。

あの乾いた^{かわ}大気の中、見上げると吸込まれて行きそうなほど見事に澄んだ秋空の青さとか、

赤茶けた低い丘状の山肌^{やまはだ}とか、冬の凍結した河面を渡る牛車の音だとか、そういったものが、ふっと時間の淵^{ふち}を飛び越えて噴水のようにふきあげてくることがある。²²⁾

しかしながら、ここで五木は「支配者側の一員として過した日々には懐旧の念を抱いているわけでは毛頭ない」。²³⁾ そのとき、五木は、自分の育った朝鮮が「一つの罪の土地であったという観念」に襲われるのである。²⁴⁾ だがさらに、五木にとって、こうした「秋空」はまたあの父親の姿を思い起こさせたであろう。幼少期、五木は父に＜雲峯^{ウンボウ}＞という俳名をつけられ、俳句を作らされたという。五木は父に褒められたという句——「秋空に 響く爆音^{はやぶさ} 隼機」——を鬱々たる思いで追想している。

隼機とは、当時の少年のあこがれの的だった戦闘機の名前である。＜アキゾラニ ヒビク バクオン ハヤブサキ＞とは一体なんであろうか。「写実に徹して、主観を出さない所がいい」しかつめらしい顔で言った父親の言葉を私は今だに苦々しい思いで噛みしめることがある。そんな父親を私は好きでなかった。そもそも学校で倫理などを教える父親を持つことは、子供にとって耐えがたい不幸であると思う。²⁵⁾

「秋空」、軍国主義、厳格な父。もし五木がこうした連想を働かせたとしたら、最後には、五木の耳の中で、朝鮮人学生のあの「哀号！」という痛々しい声が響き渡ったのではないだろうか。

同じく、村松もまた朝鮮で見た「空」を忘れることができなかった。村松が小林勝を「きわだって色濃い「朝鮮の影」を映していた作家」として高く評価していたことはよく知られている。²⁶⁾ 気になるのは、そんな村松が小林の次の言葉に着目していた点である——「君たちはどこへ行ったか。今日小菅の細長い窓から見初秋の空はどんよりと暗い。堀、プラタナス、拡声器、運動場の陰うつな影絵の中に、君たちの顔が現れる。君たち、たけだけしくも美しい眼をもった朝鮮の同志たち」。²⁷⁾ これは、朝鮮戦争反対・破壊活動防止法案反対のデモで逮捕された小林が東京拘置所で書いた「覚え書き」の中に残されていた言葉である。²⁸⁾ 村松は次のように述べている。

わたしは死んだ小林勝の「覚え書き」が、彼が残した貴重な記録の数々のなかでも、とくに印象深い。植民地に生まれた作家として、朝鮮に対して「懐しいといつてはならぬ」とみずから禁じた作家が、「君たちはどこへ行ったか」のなかで、自然を現わす二つの単語を使った。そのたった二つの単語が、みずから禁じたはずの懐しさを、率直に映しだす鏡となったことは、偶然か。「初秋の空」と「プラタナス」。これはたんに獄窓から見た風景ではない。彼が選びだした、他の言葉に代置できぬ「朝鮮の影」である。少年時代の小林勝が土埃の舞う果てしのない道で見た朝鮮のプラタナス。彼がひきこまれるような思いで仰いだ朝鮮の紺青の秋の空。この二つの言葉に、小林は育った朝鮮の自然を映しだしていた、とわたしは考える。²⁹⁾

村松は、小林がさりげなく差し挟んだ「プラタナス」、そして「初秋の空」という「二つの単語」

に対して敏感に反応している。このことは、村松もまた朝鮮の自然、とりわけ「プラタナス」と「初秋の空」に魅了されていたことの証拠となっているのではないだろうか。しかしながら、「哀号」という声に囚われた村松が、失われた故郷の「プラタナス」、そして「初秋の空」に対してただ哀愁を抱いていただけとは考えにくい。

それでは森崎の場合はどうだろうか。森崎は幼少期に見た「空」を思わせる数篇の詩を書いている。たとえば、1998年に出版された詩集『地球の祈り』の中に「空」と題された詩がある。

あのこと

といっても戦争に敗れたあとのこと
学生たちの朝は
米つぶがありやなしやの粥かゆでした
だまって流しへ棄すてる人
だまって胃袋へ流す人
米も麦も配給
ほんのひとすくい
わたしは食欲を失っていました
ひとあし ひとあし
考えながら生きなきゃならないのですから
見知らぬにほんで
にほん知らずの女の子が
笑い話ね

ああ

はるかな地図の空
からだのなかびっしりと罪の思い
植民二世は空を失いました

鳥さん

あなたに空はありますか³⁰⁾

この詩では、「内地知らずの内地人」として育った森崎自身の、朝鮮で見た「空」への複雑な心境が表現されている。「ああ／はるかな地図の空」——この詩的言語は、一見、もはや戻ることのできない朝鮮半島の「空」に郷愁を漂わせている「わたし」の様子が映し出されているかのように感じられる。しかし、「わたし」は、朝鮮のまさにその廣大無辺な「空」の下で育った自分自身の立場に気づいている——「からだのなかびっしりと罪の思い／植民二世は空を失いました」。

幼い森崎を包み込んだ朝鮮の「空」は、まさに彼女の原風景となる。だが、森崎の紡ぎ出す詩的言語は、ただ無邪気にあの「空」を礼賛しているわけではない。つまり、彼女の詩的言語は、

失われた故郷の「空」への果敢ない憧憬を描いて終ることはなく、むしろそうする権利すら持つことが許されない「植民二世」の姿を炙り出していくのである。それにしても、この詩の最後の一行「鳥さん／あなたに空はありますか」は、何を意味しているのであろうか。この詩的言語は読者を寂しくやるせない気持ちにさせるが、ここに重要なテーマが隠されているような気がする。「鳥さん」に投げかけられた、「わたし」の切ない問いかけ——それは、「空」と題されたもう一つの詩へと読者を導いていくだろう。その詩は、詩集『ささ笛ひとつ』の中に収められている。

あれは消え去った町の
ちいさな観音堂のそばでした
弘法大師の石像のまえ
老人は自転車をとめ
朝日にかしわ手を打っていた
しずかに頭をたれていたよ

いまわたしは福岡の
夜あけのビル街
とある病院の五階の個室で
明けゆく空をみえています
あの老人へ目礼を送り
寄る年波のほこりをはらって
ビルの谷間の空を仰ぐ

風が流れます
始発列車が走ります
朝です
朝がきたよ
太陽のとどこかぬ谷間
窓いっぱい空のブルー
雲もない
鳥もとばない
空のブルー³¹⁾

「あれは消え去った町の／ちいさな観音堂のそばでした」——この「消え去った町」とは植民地朝鮮にあった、どこかのある町のことだろうか。けれども、今、「わたし」は「夜あけのビル街」の中の「とある病院の五階の個室」にいる。そこで「明けゆく空をみて」、「ビルの谷間の空を仰ぐ」「わたし」。すなわち、重要なのは、まさしくこの「わたし」が、終戦後から復興し高度成長を成し遂げた日本にいるという点である。それにしても、この詩の最後の第三連には意味

深げな詩的言語が並んでいる。そこからは、朝の清澄感が感じられる一方、寂しく陰鬱な雰囲気も醸し出されていることがわかるだろう。もちろん、それには病室にいるという「わたし」の事情がかかわっていることは間違いないが、果たしてそれだけだろうか。

清々しい朝——「風が流れます／始発列車が走ります／朝です／朝がきたよ」。ところが、朝が来ても、太陽の光は届かない——「太陽のとどこかぬ谷間／窓いっぱい空のブルー／雲もない／鳥もとばない／空のブルー」。つまり、「朝日」を浴びることのできない「わたし」がここにいるのである。それはまた、「消え去った町」であの「老人」が見たような「朝日」と出会うことが難しい境遇に置かれている「わたし」の様子がそこで映し出されているのだ。そして、このとき、この詩の「空のブルー」という表現の両義性に気づく。たとえば、英語のブルー (blue) は青いという意味もあるが、いうまでもなく憂鬱という意味もある。森崎の「空のブルー」という詩的言語は、一見、雲一つない麗らかに晴れた青い「空」を彷彿とさせるかもしれないが、実際、その「空」は森崎が幼少時代に朝鮮の大自然に囲まれる中で、「心打たれ、ぼろぼろ涙をこぼして」見た、あの「空」ではないのだ。森崎を天上から包み込んだ広大な空は、「ビルの谷間から仰ぐ」狭い「空」とは大きく異なる。けれども、また、この詩がまるで追い打ちをかけるかのように読者を寂寞たる思いにさせるのは、「鳥」がいないことではないだろうか——「鳥もとばない」。戦後日本において、目を見張る急速な経済成長の過程で空の壮大な景色は失われ続けている。終戦後から現在まで、一心不乱に工業化・文明化を推し進める中で、日本社会は自然景観を破壊し、生きものたちの住処を容赦なく奪い去った。この詩において、戦後のそうした日本社会の中で、「わたし」が思い浮かべるのは、「消え去った町」で「朝日」の眩い光に彩られたあの「空」だっただろう。しかし、あの「空」を想起した瞬間、「わたし」は植民者としての自分自身の立ち位置をより一層深く自覚したに違いない。なぜなら、あの涙ぐましい「空」もまた「日帝時代」の大地から見たものに過ぎなかったのだから。このことは「わたし」、ひいては森崎をさらに憂鬱にさせたであろう。「空」という二つの詩で展開される、朝鮮のまさしく空との「ダイアローグ」、もしくは「共振」の根底にも、たとえば、大地をたたいて「むせびなく」あの「少女の」声——「哀号 哀号」——が渦巻いているように思える。

3. いのち

詩集『ささ笛ひとつ』には、「千年の草っ原」という詩が載せられている。このタイトルからもわかるように、この詩もまた自然がテーマとなっており、そしてここでも朝鮮半島の空が描かれている点は注目に値する。しかしながら、「空」と題された先の二つの詩とは何かが違う。まず気づくのは、「千年の草っ原」という詩は、孫への「語りかけ」という形式をとっている点であろう。二年半、がまんして手に入れたおもちゃを買って喜ぶ孫の姿——

手をつないで孫とおもちゃを買う
「ずーとがまんしてたよね
おりこうさん
ママもパパもよかったねっていつてくれるよ」

悠のかおがはっきりとゆるむ
おおきな声でこたえる
「あのね二年半がまんしてたんだよ」
ママがあそこでくすくす³²⁾

しかし、この詩のその穏やかな雰囲気は、徐々に、暗澹たるものへと一変していく。森崎の詩はこう続く。

スーパーマーケットはいつもの人むれ
ショッピングカートがぞろぞろと流れる
ゲーム機の騒音は幼児のおもり
テレビのまえにはおとしよりのだんまり³³⁾

スーパーマーケットやショッピングカート。ゲーム機、そしてテレビ。そのどれもが戦後日本の高度成長および現代日本の象徴とされるものだ。だが、「いつもの人むれ」、「ぞろぞろと流れる」、「騒音」、「おもり」、「だんまり」という言葉からわかるように、この詩は、消費文化のイデオロギー上に成り立つ戦後日本に対して批判の矛先を向けている。

けれども、さらにその後、この詩が、そのような戦後日本とは明らかに違う世界を複雑な形でふと描き出している点は意味深長だ。

孫の二年半はわたしの二日
……
涙がふきあげ罪があふれる
あれは昔むかしのわたしの幼ない二年半

ひろい空たかい空あおいあおい空
光と風とポプラと夢と
蝶になった二年半
朝鮮人の男の子たちがトンボになっていたよ

ここは現代
高速物流社会文明国
消費がレジャーの檻のなかです
日夜欲望が支配する

ごめんね悠
いっしょにあそぼ
コンクリートの壁の谷間

ダイオキシンの春一番が吹きわたる³⁴⁾

終戦後、日本は焼け野原から高度成長を遂げ、経済発展を推し進めてきた。ところが、その一方で、復興を成し遂げた日本は、深刻な環境問題に直面することになる。大気は「ダイオキシン」により汚染されていき、そして、急速にビルが立ち並ぶ中で自然の風景は日々失われていく。「コンクリートの壁の谷間」から見える「空」も、視野の狭くなった「空」でしかない。そのとき「わたし」は「ひろい空たかい空あおいあおい空」、つまりあの朝鮮を思い出すのだ——「ひろい空たかい空あおいあおい空／光と風とポプラと夢と／蝶になった二年半」。しかし、「わたし」は「涙がふきあげ罪があふれる」ことになる。

ところでまた、この詩において「ごめんね悠」という言葉も見逃すことはできないだろう。孫に対する「わたし」の謝罪。たとえば、2000年に出版された『いのちへの手紙』の中で、森崎はこう述べていた。

わたしは原稿料が入ると、旅へ出た。心を放つ空間を求めて。その空間にひびいているものに出会いたくて。でも、気がつきませんでした。大人のわたしは、それっぽっちの旅であれ、旅をする手段を持っていたのです。一応の平和と、発展しつづける諸産業に助けられて。なんとか自活し、友人や子世代の手助けに支えられて心身の回復を図るかのよう旅をし、歴史をさかのぼる旅さえてきた。しかし私は、孫世代の心の旅のことなど忘れていたのです。生まれたいのちを養う貴重な空間。文明を越えたその原郷を、こわした世代だと知りました。³⁵⁾

森崎のこの言葉から、孫世代に対する彼女の居た堪れない気持ちが読みとれる。豊かさや経済成長を至上命令とした政策を推し進め、自然環境破壊を助長してきた日本で、彼／女たちはこれからも長く生きなければならないのである。けれども、さらにここで看過できないのは、このとき、戦後日本に対する森崎の辛辣な批判の矛先が、皮肉にも自分自身に向かっている点である。「ごめんね悠」という詩的言語に仄めかされているのは、環境破壊を先導してきた世代の一人である「わたし」、そして森崎自身のさらなる罪の意識の存在であろう。

しかしながら、詩「千年の草っ原」は、そうした度重なる自責の念に苛まれた「わたし」、もしくは森崎の悲観的な心情をただ浮き彫りにしようとしているわけではない。たとえば、1990年代以降から森崎が「いのち」という言葉を頻繁に用いるようになってきたという事実は興味深い——1994年『いのちを産む』、『いのちの素顔』、1998年『いのち、響きあう』、2000年『いのちへの手紙』、2001年『北上幻想——いのちの母国をさがす旅』、『見知らぬわたし——老いて出会う、いのち——』、『いのちの母国探し』、そして2004年に『いのちへの旅——韓国・沖縄・宗像——』が出版されている。とりわけ、『いのちの素顔』の中で森崎は、「生きるということは、[…] 動き止まない時代の中で異なった原体験と世界観を抱きながら、しかし同じ条件下の時空のもとで、自分を生かし相手をも生かそうとする営みだ」と述べていた。³⁶⁾ この言葉は、「いのち」という森崎の考え方を認識する上で重要だといえるだろう。しかしこのとき、『いのちへの手紙』の中で述べられた、森崎の次の言葉も無視できないのではないだろうか。

ありのままの素肌のいのち、そのいのちを、私など老年期の者は幼少年期に、ふかぶかと受け止めてくれるひろい空と心ゆくまでたわむれた。その個人差はある。私などはその時空が、旧植民地の天地であったから、生まれたことの罪深さに苦しんできた。苦しみながら、しかし、救われてきたのである。³⁷⁾

ここで森崎は朝鮮半島の「ひろい空」について言及している。もっとも、幼年期に見たそうした「空」は、大人になった森崎にとって、「生まれたことの罪深さ」を常に自覚させる光景であり続けている。だが、あの「空」はまた、幼き森崎に、いわゆる「いのち」の響きを教えてくれたのである。そして戦後日本を生きる森崎は、あの「空」を思い出し、そのときの「いのち」の感覚を事あるごとに蘇らせてきたのだ。つまり、戦後日本で森崎はあの「空」を思うことで、まさに「苦しみながら、しかし、救われてきたのである」。

詩「千の草っ原」の最後の三連では、あの朝鮮の「ひろい空たかい空あおいあおい空」に天上からやさしく包まれていた「ひろっぱ」、それから「草っ原」へと詩的想像力が広がっていく。ここで森崎の声が木霊する——「青い空が、私が遊んでいる庭や裏のひろっぱの上に、いつもあったから。その空の朝昼夕の変化をたのしむとともに、その美しさを永生のものと感じていたのだ」。³⁸⁾ 朝鮮のそんな「空」と時空を共有する「ひろっぱ」や「草っ原」にはやはり、「いのち」の活力が漲っている。

悠

二年半のがまんなんてへのへのへ
お金なんてくさくらえ
壁になんか泣かない

あったかな手であそぼ
いっしょにあそぼ
いのちは
千年のひろっぱ

ね

悠

千年の草っ原³⁹⁾

自然の壮大さと驚異的な生命力、響き合う「いのち」。「いのち」の神秘を思わせる「千年のひろっぱ」、「千年の草っ原」——ここでは「草」はないていない。そして、「オモニ」もそうだろう。詩「千年の草っ原」の中に、森崎の新たな詩的ヴィジョンの萌芽が見えてくる。この詩では、孫「悠」がこれから見る／見てほしい光景、つまり、幼き頃、森崎が朝鮮で感じた「いのち」が今日も明日も響き続けている光景が描かれているのではないだろうか。この詩を通して、森崎は「悠」、ひいては孫世代の全ての者たちに「いのち」の思想を伝えようと語りかけている。

森崎がようやく見つけ出した文学的視点。⁴⁰⁾ だが、むろん、この時点で、森崎の心身に深く染み渡った罪の意識が完全に解消されたと考えることは早計に失するだろう。そもそも、森崎の詩から、あの「哀号」という声を掻き消すことなどできるのだろうか。

おわりに

以上、考察してきたように、森崎は、朝鮮半島の自然や人々との「ダイアログ」、もしくは「共振」を通じて、独創的な詩的世界を生み出してきた詩人である。だが、そうした「ダイアログ」や「共振」を繰り返す中で、あの「むせびなく」声——「哀号」——を心身に深く受け止めながら、森崎は植民者二世としての立場を深く自覚してきた。とはいっても、森崎の詩作活動は、そこでひたすら足踏みして終わっているわけではない。

森崎にとって、もとより朝鮮は苦しい内省を起こさせる場であると同時に、彼女が感動してやまない「いのち」が響く可能性を秘めた場でもあった。ただし、興味深いのは、そうした「いのち」の場がまた、戦後日本の家父長制に対する、森崎の厳しい批判精神に活力を与える源泉にもなってきたという点である。たとえば、1998年に出版された『いのち、響きあう』の中で森崎はこう述べている。

日本で暮らしつつ日本生まれの日本人男女の、そのいのちの根っここのありようを、知りたいと願った。それは、いわば書きことばや文字の世界の、体系化され整理されたそれではない。文字による体系化は周知に思えた。戦時下の外地で文字界を通して日本文化をかいつまんだ女の子の私の目には、それは社会的支配力を所有した層の男性の、独断的な世界認識にすぎなかった。そこには女の本質もなく、私が愛した朝鮮の心もなく、私が感心しそして原罪感の根源となった、朝鮮半島にひろがる朝やけ空とつづいている宇宙への、つまり地球とともに呼応する自然界の律動への感応もないのだった。彼らの所有欲と支配欲。帰国した地の男のからだにあふれている旧態然とした家意識。ムラの感情。巷の笑い。しかし絶望したくないのだ。なぜなら、私は女に生まれているのだから。勝手に彼らの体系によって色づけされているけれど、でも、それは、文字界を主体とした領域のことである。私の本質は百年や千年の汚染になぞ弱りはしない。必ずや、この日本の暮らしにも、私が植民地で感じたような、体系化の外でのびのびと生きる人間群の本質があるはずだと思う。それに会いたい。そう思いつづけた。⁴¹⁾

ここで、森崎が戦後の家父長制社会を痛烈に批判していることは間違いない——この点において、森崎の批判精神は、村松、小林、五木のものと比べて、ひときわ異彩を放っている。⁴²⁾ しかしこのとき、森崎がそうした日本の古き制度を乗り越えるために、戦後日本の中にも「植民地で感じたような、体系化の外でのびのびと生きる人間群の本質」を見つけ出そうと奮闘している点に注意を払う必要がある。

いずれにしても、「私が感心しそして原罪感の根源となった、朝鮮半島にひろがる朝やけ空とつづいている宇宙への、つまり地球とともに呼応する自然界の律動への感応」(筆者強調)とい

う言葉で自ら告白しているように、森崎にとって、朝鮮という場は絶えず両面的である。つまり、森崎特有の詩的言語は、まさにそうしたアンビバレントな場である植民地朝鮮との絶え間ない交渉——「ダイアローグ」、さらには「共振」——を通して生み出され続けているのだ。そして、植民者二世によって想像・創造されたその詩的言語は、大日本帝国の植民地の歴史が忘却されていく時代を生きる、ともかく＜私＞のようなく日本人＞に、あの植民地朝鮮について——時には激しくも——静かにゆっくりと語り出す。＜私＞の新たなる自己批判が開始されるのを辛抱強く待ちながら。

*本稿は日本比較文学会第41回中部大会シンポジウム「戦争（争い）における記憶と忘却のナラティブ—和解に向けて」（2016年12月3日、名古屋大学）で行った口頭発表（タイトル「引揚者と（旧）植民地の記憶——森崎和江の詩と「いのち」について——」）の原稿に大幅な加筆修正を施したものである。

**本研究は2018-2021年度日本学術振興会科学研究費助成事業による若手研究「カリブ海諸島及び朝鮮半島における（旧）植民者の文学に関する比較越境的研究」（研究課題：18K12354）の一部である。また、本研究は2019年度中京大学内外研究員制度（在外研究）の助成も受けた。

注

- 1) 森崎和江「朝鮮断章・1——わたしのかお——」森崎和江『ははのくにとの幻想婚』、現代思潮社、1970年所収、p. 212。
- 2) 森崎「朝鮮断章・1——わたしのかお——」、p. 212。
- 3) 森崎和江「私が詩を書き初めた頃」森崎和江『風』、沖積舎、1982年所収、p. 89。
- 4) 森崎和江「あとがき」森崎和江『かりうどの朝』、深夜叢書社、1974年所収、p. 138。
- 5) 森崎和江「シンボルとしての対話を拒絶する」森崎和江『かりうどの朝』、深夜叢書社、1974年所収、pp. 88-91。
- 6) 森崎和江「あとがき」森崎和江『地球の祈り』、深夜叢書社、1998年所収、p. 168。
- 7) 森崎「あとがき」、1998年、p. 168。
- 8) 森崎「あとがき」、1974年、p. 139。
- 9) 村松武司『増補 遙かなる故郷——ライと朝鮮の文学——』の「解説 楯円から円へ——ライ、朝鮮、村松武司——」において、斎藤真理子は次のように指摘している。「村松と森崎は多くの点で違っている。村松は京成で布帛製造業を営む事業家の息子であり、森崎は教育者の娘として大邱と慶州で育った。村松の家庭は、母方の祖父が日清戦争の際に朝鮮語通訳も務めたといういわば「古株」である。一方、森崎の両親は大正デモクラシーの申し子のような夫婦で、恋愛結婚に反対され、昭和初期に朝鮮にやってきて、地縁血縁に縛られない自由な核家族を築いた。ついでに言うならば、森崎の育った家庭には、「朝鮮人を尊敬せよ」という父の教えがいきわたっていた。[...] このように、さまざまに違う二人でありながら、見知らぬ日本へやってきてから、日本に向かって「朝鮮」を投げかけることの困難に苦しんだ色合いは共通している。もとより植民地体験とは個人のものに止まらない。本来、たった一人の植民者が「帰国」することでさえ、その社会の成り立ちが、よって立つ歴史が、根底から一度攪拌され、その弱点があばきだされるような出来事である。しかし攪拌は周囲のものにはそれと見えなから、当事者は苦しむ」。斎藤真理子「解説 楯円から円へ——ライ、朝鮮、村松武司——」村松武司『増補 遙かなる故郷——ライと朝鮮の文学——』、皓星社、2019年所収、p. 297。
- 10) 村松武司「鞭と哀号＜植民者の眼V＞」村松武司『朝鮮植民者——ある明治人の生涯——』、三省堂、

- 1972年所収, pp. 176-7。
- 11) 村松「鞭と哀号<植民者の眼V>」, p. 176。
- 12) 村松「鞭と哀号<植民者の眼V>」, p. 178。
- 13) 村松「鞭と哀号<植民者の眼V>」, p. 178。たとえば、伊藤亜人、大村益夫、梶村秀樹、武田幸男、高崎宗司監修『【新訂増補】朝鮮を知る事典』において、「アイゴ」は次のように説明されている。「朝鮮語の感動詞。感情を瞬間的に表現するとき用いられる。悲しいとき、うれしいとき、腹立たしいとき、あきれたとき、人に久しぶりにあったとき、力のいるとき等、その表現範囲はきわめてひろい。アイグ、オイグ、エーグ、女ことばとしてアイグモニのように、音と形を変えながら、そのときどきの感動、感嘆のニュアンスや程度、男女語のちがいを、微妙かつ豊かに表現しわけることができる。なお、葬式で泣きさけぶことを指す名詞の<哀号>は、まったく別種の言葉であり、<哀号>の朝鮮語はエーホ aeho である。哀号はもと中国古代の風習であったが、形式化されて葬儀の重要な儀礼となり、それを業とする哭人を加えて号泣させることも行われた。この儀礼は朝鮮、日本にも伝わり、韓国では今でも見られる。」伊藤亜人、大村益夫、梶村秀樹、武田幸男、高崎宗司監修『【新訂増補】朝鮮を知る事典』, 平凡社, 2000年, p. 1。つまり、村松は、「哀号」のもう一つの隠された意味を知っていたことになるだろう。
- 14) 五木寛之「長い旅の始まり——外地引揚派の発想——」(下), 毎日新聞夕刊, 1969年1月22日。
- 15) 高崎宗司は次のように述べている。「元在朝日本人の朝鮮時代への対し方には、大きく分けて三つのタイプがあるようである。第一のタイプは、自分たちの行動は立派なものだったとするものである。第二のタイプは、無邪気に朝鮮時代を懐かしむものである。そして、第三のタイプは、自己批判しているものである。」高崎は、小林勝、村松武司、森崎和江を「第三のタイプ」として分類するが、この「第三のタイプ」に五木寛之を加えてもいいだろう。だが、こうしたタイプ分けは、「元在朝日本人」を便宜上あくまで「大きく」分けているだけであり、もちろん、彼/女たちのそれぞれ異なった植民地体験を安易に一般化することはできない。高崎宗司『植民地朝鮮の日本人』, 岩波新書, 2002年, pp. 201-7。
- 16) 森崎和江「海」森崎和江『ささ笛ひとつ』, 思潮社, 2004年所収, p. 45。
- 17) 森崎「朝鮮断章・1——わたしのかお——」, pp. 213-4。
- 18) 森崎和江「あとがき」森崎和江『慶州は母の呼び声——わが原郷——』, 洋泉社, 2006年, p. 243。
- 19) 森崎和江「朝鮮断章・2——土堀——」森崎和江『ははのくにとの幻想婚』, 現代思潮社, 1970年所収, p. 228。
- 20) 森崎和江「哀号」森崎和江『ささ笛ひとつ』, 思潮社, 2004年所収, pp. 48-9。
- 21) 森崎「朝鮮断章・2——土堀——」, p. 228
- 22) 五木寛之「アカシアの花の下で」五木寛之『風に吹かれて』, 読売新聞社, 1968年所収, p. 110。
- 23) 五木「アカシアの花の下で」, p. 109。
- 24) 五木「アカシアの花の下で」, p. 110。
- 25) 五木寛之「女を書くという事」五木寛之『風に吹かれて』, 読売新聞社, 1968年所収, p. 176。
- 26) 村松武司「作家・小林勝の「朝鮮」」村松武司『朝鮮植民者——ある明治人の生涯——』, 三省堂, 1972年所収, p. 254。
- 27) 小林勝「私の「朝鮮」——あとがきに代えて——」小林勝『チョッパリ——小林勝小説集——』, 三省堂, 1970年所収, p. 297。
- 28) 小説集『チョッパリ』の中の「私の「朝鮮」——あとがきに代えて——」において、小林は「君たちはどこへ行ったか」と題されたメモを全文載せている。そのメモについて小林は次のように書いている。「これを書いていた私を捉えていたものは、ふるえだすような憤怒なのです。刑を終えた朝鮮人のうち特に政治犯は、日本在留をとり消され、刑務所から警視庁へ連行され、形式的な審査の後に、大村収容所へ送られていきました。」小林「私の「朝鮮」——あとがきに代えて——」, p. 298。そして、小林はまた述べている。「私は戦後になって、はじめて自分の国がその過去に朝鮮に対して何をやってきたか

を知りました。私のせいではないとはいえ、私が日本人としてそこに生まれ、そこで育ったことの意味を考え、つらい気持ちになりました。」小林「私の「朝鮮」——あとがきに代えて——」, p. 299。

- 29) 村松「作家・小林勝の「朝鮮」」, pp. 255-6。
- 30) 森崎和江「空」森崎和江『地球の祈り』, 深夜叢書社, 1998年所収, pp. 14-5。
- 31) 森崎和江「空」森崎和江『ささ笛ひとつ』, 思潮社, 2004年所収, pp. 24-5。
- 32) 森崎和江「千年の草っ原」森崎和江『ささ笛ひとつ』, 思潮社, 2004年所収, p. 20。
- 33) 森崎「千年の草っ原」, p. 21。
- 34) 森崎「千年の草っ原」, pp. 21-2。
- 35) 森崎和江『いのちへの手紙』, 御茶の水書房, 2000年, p. 33。
- 36) 森崎和江『いのちの素顔』, 岩波書店, 1994年, p. 33。また、森崎の「いのち」に思想について考える際、「産む」という営為は重要である。「なぜ、男たちは無原則に子を産ませるのか。なぜそのことに無意識なのか。いのちをこの世に送ることに對して、なぜ無感動でおれるのか。米も麦も塩もない配給生活の焼け野が原には、「国破れて山河あり」という、どこかべつとりとした欲情が寝ころんでいて、その安らぎは男尊女卑を卑猥に唄っていました。破れた政治と、無思想な生殖がひろがる地面の上で。一方では親たちが平気で娘を売っていました。強姦される少女。捨て子。復興する遊廓。パンパンガール。私は今でもよく覚えています。娘っこの私が、とある集会で、産むのは女ではない。人間は新しい生命を両性で産むのだ、と壇上で話したとき、笑った男たちの顔を。それでも、中年男の集りでも、同じことを話さずにはおれませんでした。手ひどい侮蔑が返ってきましたが。」森崎和江『いのち、響きあう』, 藤原書店, 1998年, p. 79。
- 37) 森崎『いのちへの手紙』, p. 42。
- 38) 森崎『いのちの素顔』, p. 32。なお、森崎の次の言葉は印象的である。「たとえば「羽衣」という民話がある。その絵本を読む。その童謡をレコードで聞く。目をつむって聞きながら、「天女がうっとり見上げる空へ舞いました」などという歌詞が描く天空のシーンを、「ジャックと豆の木」の民話が描く天上の雲のくにと天空つづきの世界として心に描いている。[...] けれども、一九九〇年代の今、私は、五歳の幼児に羽衣を語り聞かせる、あの空を持たない。彼が、空を持たない悲しみを、オゾン層の破壊などと言って語るのが胸にこたえていて、ちょっと待ってね、すぐにあの空を呼んであげるから、と心で言いつつ、言葉にできずにいる。だから羽衣は語れないままである。そして彼はしきりに話しかける。彼の天空を。そこには羽衣が舞う余地はない。彼ら子ども社会の情報が育てた宇宙。宇宙人とのたたかいがくりかえされている。地球を救うために。時間空間の壁を越えて」。森崎『いのちの素顔』, p. 32-3。
- 39) 森崎「千年の草っ原」, p. 23。
- 40) 小林勝は自身の「文学的視点」について、次のように言及したことがあった。「問題は、あたり前のことながら、現実のその無惨さ困難さにひたすら垂直に沈みこんでいくことではなく、日本人と朝鮮人の間に一見絶望的に横たわる現実のどろどろした（断絶と憎しみの）沼に長嘆息することでもなく、また何の根拠もない楽天的な空しい希望に身をゆだねることもない [...]」。小林「私の「朝鮮」——あとがきに代えて——」, p. 294。「私にとって朝鮮とは何か、ということは現実問題としてはまさにその未来にかかわることなのであり、その未来を展望しようとする私の文学的視点がどこにすえおかれ、どこから光を発するかといえば、それはこの総体における「過去」の、そもそもの出発点なのです。私は「過去」をふりかえるのではなく、その原点に立って、そこから未来を見透していこうと考えているのです」。小林「私の「朝鮮」——あとがきに代えて——」, pp. 295-6。もちろん、森崎の「文学的視点」が、小林とまったく同じ感情、たとえば「憤怒」によって支えられているとは考えられない。しかし、そうだととしても、小林の未来を見据える目線は、森崎のものと同通する点もあるだろう。ちなみに、村松武司は、小林について次のように説明していた。「植民者としての過去を、彼の作家的・実践者の生活をかけて、小林は、どのように告白し続けたか。小林は、それが、日本の過去ではなく、日本の現在として、それが、自分の過去ではなく、自分の現在として、ここに存在することを書き続けた作家ではなかった

- か […]」。村松「作家・小林勝の「朝鮮」」, pp. 256-7。
- 41) 森崎『いのち、響きあう』, pp. 123-4。
- 42) 結城正美とのインタビューで述べた、森崎の次の発言は印象深い。そのとき、森崎は「女性問題」だけでなく、「性的マイノリティの問題」にも着目している。「女のことばかり考えてきたようにみえるけれど、そうではなくて、性的マイノリティの問題もずっと頭にあるのです。いのちを受け止め合う力を養いたい、とずっと書いてきているのに、同性愛というのは、私がみていたいのは、そんな単純なものではないよ、と教えられるのですよね。」結城正美「森崎和江インタビュー“生む・生まれる”ことば:いのちの思想をめぐって」『文学と環境』14号 2011年1月, p. 14。

引用文献

- 五木寛之『風に吹かれて』, 読売新聞社, 1968年
——「長い旅の始まり——外地引揚派の発想——」(下), 毎日新聞夕刊, 1969年1月22日
伊藤亜人, 大村益夫, 梶村秀樹, 武田幸男, 高崎宗司監修『【新訂増補】朝鮮を知る事典』, 平凡社, 2000年
小林勝『チョッパリ——小林勝小説集——』, 三省堂, 1970年
高崎宗司『植民地朝鮮の日本人』, 岩波新書, 2002年
村松武司『朝鮮植民者——ある明治人の生涯——』, 三省堂, 1972年
——『増補 遙かなる故郷——ライと朝鮮の文学——』, 皓星社, 2019年
森崎和江『ははのくにとの幻想婚』, 現代思潮社, 1970年
——『かりうどの朝』, 深夜叢書社, 1974年
——『風』, 沖積舎, 1982年
——『いのちの素顔』, 岩波書店, 1994年
——『いのちを産む』, 弘文堂, 1994年
——『いのち、響きあう』, 藤原書店, 1998年
——『地球の祈り』, 深夜叢書社, 1998年
——『いのちへの手紙』, 御茶の水書房, 2000年
——『いのちの母国探し』, 風濤社, 2001年
——『北上幻想——いのちの母国をさがす旅』, 岩波書店, 2001年
——『見知らぬわたし——老いて出会う, いのち——』東方出版, 2001年
——『いのちへの旅——韓国・沖縄・宗像——』, 岩波書店, 2004年
——『ささ笛ひとつ』, 思潮社, 2004年
——『慶州は母の呼び声——わが原郷——』, 洋泉社, 2006年
結城正美「森崎和江インタビュー“生む・生まれる”ことば:いのちの思想をめぐって」『文学と環境』14号 2011年1月, 5-16